

巻頭言

京都文教大学地域協働研究教育センター長 森 正美

地域で学び、地域で育てる。京都文教大学では、開学以来「現場実践教育」に注力してきた。1996年開学当初の人間学部における、文化人類学・臨床心理学の専門領域において、さらに2022年現在の総合社会学部、臨床心理学部、こども教育学部に広がった専門性においても、現場からの学び、現場での教育が重要であることは変わらない。その中で「地域」は、最も身近な現場であり、本学の「研究」「教育」「実践」にとって不可欠な存在であり続けてきた。

多くの学生や教職員が、地域における教育・研究・社会貢献に携わってきた実績が評価され、2014年の文部科学省地（知）の拠点事業「京都府南部地域ともいき（共生）キャンパスで育てる地域人材」に採択された。その採択によって、本学は、地（知）の拠点（Center of Community: COC）として、地域の様々なニーズを掬い上げ学内のシーズを生かし課題解決に向かう責務を負った。本学では、それまでの連携実績を生かし、地域の当事者、実践家、団体、行政や企業など多様な人々との協働による①住民参画型、②産官学連携型という2つの「ともいき地域志向研究」を制度化し、地域のプラットフォーム型シンクタンクの役割を果たすことを目指した。

幸いにも、多くの協働研究が継続的に実践されてきた。COC（その後のCOC+）補助期間後も、大学予算により、地域志向研究助成を続け、2014年から2021年度までに、のべ135件の研究が実施され、地域からの研究参加者は504名にのぼっている。共同研究は、研究成果を学生教育に生かし、公開講座・公開型研究会を開催し、年度末には報告書の発行と報告会の開催を積み重ねた。

それらの成果に基づき、2019年度・2020年度の京都文教大学刊行助成金とミネルヴァ書房の助力を得て、橋本 祥夫編著『京都・宇治発 地域協働の総合的な学習「宇治学」副読本による教育実践』、松田美枝編著『多様な私たちがともに暮らす地域障がい者・高齢者・子ども・大学』（いずれも2020）、片山明久編著『旅行者と地域が創造する「ものがたり観光」宇治・伏見観光のいまとこれから』、森正美編著『実践！ 防災と協働のまちづくり住民・企業・行政・大学で地域をつなぐ』（いずれも2021）という4冊の書籍を出版し、成果を社会に還元した。

本ジャーナルは、以上のような「地域志向ともいき研究」の蓄積を、さらに継続的に育てていくための新たな挑戦である。多様な分野の多彩な執筆者による内容をより広く知っていただき、その研究や実践について、意見を交換し、共に「地域を育てる」ための糧とすることを目指している。本ジャーナルが、そのための議論の素材を発信し、議論の場となることを願っている。共に本ジャーナルを通じて地域を育てていただくために、ご支援ご指導をいただけることを願っています。